「未来社会の仏教と私の役割」

東国大学大学院　茂松性典

釈尊が説いた八万四千の法門は、時間と空間とを自在に円満せしめた真理の教えである。

印度に興起した仏教は、印度宗教をその淵源として、北方仏教と南方仏教とに伝道され、その教えが伝派した地域の習俗、気候、文化、土俗宗教などと混合されて、特異な仏教文化を形成したが、これは時空を超越するものであって、真理を正道した教えなればこそとうけ止めることができる。

四諦八正道を覚知して、森羅万象を根本分析したうえで、人間の生命の本質を覚解した釈尊の教えは、時節と場所の条件に臨機応変する真実不変なるものであって、苦集滅道の要体を示して、機根相応に説示されたものである。このゆえに、言語や思想の表現の変遷は見られても、仏教の生命自体の持つ根本義は全くとして不動であるといえよう。

そして、この見地より立って、未来社会の仏教を捉えたうえで、私の役割を考えてみれば次の様になると思われる。

①未来社会は現在社会よりも、物量的な生活慣習が顕著となり、事物に対して快適度や便利度が追求されるが、その反面、精神的な生活レベルが低まり、人格の劣等性が目立ち知的行動が実践できないために、善的現象よりは、悪的要素が累積するため仏教と言えども、宗教的意義が希薄となり、哲学、思想は全く学問としてしか価値が無くなり、信仰や祖先崇拝としてその命脈を保つのみで、儀礼的習慣の継続と社交的要因の強い儀式がおこなわれるのみであろうから、未来社会における仏教は、本来性として特有すべき仏教観を人格内に確立することができず、臨終を接触点とする関わりであるところの葬送儀礼としてしか存続意義が満たされないであろう。

②人間の個人としての社会的な役割は、能力、技能、知恵などの優劣に関わり無く、あくまで本人の意志の働きによるところが、大きく左右

するであろう。従って、私の役割を仏教的な見地で見渡すならば、先ず、過去としての経歴として中一で比叡山において得度して以来、叡中、叡高、仏教大学を経て延暦寺に三年籠山行した。後、韓国ソウルに所在する東国大学校大学院に入学し、現在は修士過程にて韓国仏教学の新羅時代の元暁大師の研究と韓国天台学の修学をしており、これからの希望は、過程終了に必要な論文を作成した後、博士過程に進学致したく思っています。

機が熟して進学の暁には、上記の修学を含め、日本仏教の展開を韓国に紹介する事に努めたいと思い、先生方や大学院生に日本の書籍を提供し、韓国でも注目されている日本的禅の正法眼蔵を部分的に翻訳して韓国訳書籍を出版することや、天台学の書物を紹介することで、私の留学を意義あるものとし、ハングル語に通じることができたことをいかして、今後の日韓仏教の交流に際し通訳や交流大会の進行に協力したいと考えています。

③上記の①②を踏まえて、未来社会の仏教と私の役割を論じるならば、仏教的文化がインド、中国、韓国、日本というように伝来した経路をたどると東国へと進路をすすめていることが知れるが、この東国とは、まさに日本と韓国とを指すものであろう。即ち、仏教の現在的意義はこの両国において開花爛漫として咲き乱れているのである。

これは仏教儀礼が繁栄しているのみでなく、人心が諸要素を介在して、慣習、教育、社会理念、民族性等を、仏教精神によって樹立していることが大きいと考えられる。

現在の韓国社会は変動的に情勢が揺れ動くのであるが、これは近未来において来たるであろう精神的にも物質的にも豊かで安定した社会となるための道程であろう。韓国の未来には絶望

的な物は見られない。

未来における日韓の仏教関係を、観測するならば、韓国より仏教が伝来してより千五百年の重大なる意義よりは、今生きている人々が、根本的に至福となり、宗教生命としての意味ある仏教を目指すことが急務であり、善的体験によって社会悪を退治し、精神的な裏ずけによるバックボーンを得て、仏教による人格を打ち立てることが肝要となると思われるのである。

ここで、未来社会と私の役割について、結論的な所見をまとめるならば、釈尊が当時のインド社会において、臨機応変な対機説法をもって、人心を善導したことに倣い日韓において私という小釈迦がいかなる対機説法が出来るのかということであろう。この立場にたって私ができうるすべてのことが、実は小釈迦の役割を果たしていることとなることを私は信じるのである。